

心のふしぎをみつめて



岡部伊都子

ちくま少年図書館 62
心の相談室

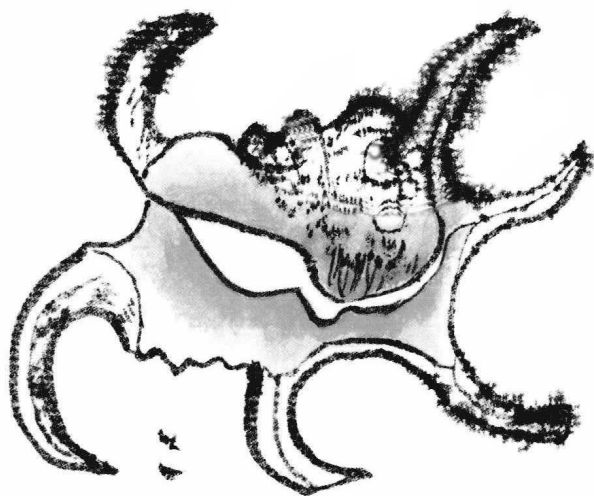


心のふしぎをみつめて

岡部伊都子

ちくま少年図書館 62

心の相談室



著者略歴

1923年大阪に生まれる。随筆家。

著書に「おむすびの味」（創元社）

「観光バスの行かない……」（新潮

文庫）「二十七度線」（講談社現代

新書）「あこがれの原初」「鬼遊び」

「シカの白ちゃん」（共に筑摩書

房）など多数がある。

筑摩書房／1982年初版

256pp.／20cm／四六判



1982年3月30日 第1刷発行

1985年12月15日 第4刷発行

著者 おか べ い つ こ
岡 部 伊 都 子

発行者 め の か わ か く ぎ え も ん
布 川 角 左 衛 門

発行所 株 式 ち く ま し ょ ぼ う
会 社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2-8

電 話 東 京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

郵便番号101-91／振替東京6-4123

© I. Okabe, Printed in Japan

厚德社印刷・和田製本

(分類) 8012 (製品) 04062 (出版社) 4604

乱丁、落丁本の場合は御面倒ですが、小社読者係宛に御
送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

心のふしぎをみつめて





心のふしぎをみつめて・もくじ

第一章 花と人と

心に咲く花 7

花に見られる 10

死にたがりの子 17

花のなくなる日 27

闘たたかいと花 36

花のいのち人のいのち 42

第二章 物と人と

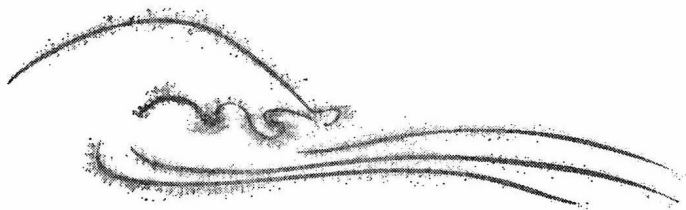
身につけるもの 55

心の着こなし 65

下駄げたとサボ 70

ごちそう盆ぼん 75

「殿さまのちゃわん」 78



おしょうゆさしを求めて
物とのつきせぬ物語 91

84

第三章 水と人と

さまざまな水の姿 103

水の清め 106

水と神さま 112

いのち水 116

水の文様もんよう 122

お水取 129

京の水 130

海のうめき 135

第四章 仏と人と

仏ってどんなもの? 145

仏と神と 148



第五章 人と人と

仏像との出会い

153

きやべつの合掌がつしやう

160

物おもう姿

168

愛の怒りいかり

176

一味の雨

184

Aさんのケーキ

193

「世界がぜんたい幸福に」

200

とりあげたお箸はし

205

母と子と

208

男性と女性と

213

あと一人の力

220

〃無関心を十字架に……〃
じゆうじか

233

愛の心

240

あとがき

254

第一章

花と人と



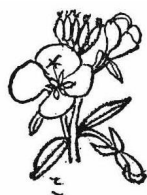
心に咲く花

ここに『花までの距離』という一冊の本があります。四国の屋島から、すぐ下の海のかなに見える大島という小島で暮らしておられる、政石蒙さんの短歌と随筆とおさめた本です。この大島は、松の多いきれいな島で、青松園と名づけられたハンセン病（ライといわれていた病）の療養所があります。

政石さんは、一九二三年（大正一二年）の六月に、愛媛県で生まれました。

高等小学校を出て一年余り産業組合に勤め、東京へ出て苦学をしました。もう、その時は、ハンセン病の初期の斑紋がからだにあらわれていたらしく、その症状がどういうものかを、政石さんはお母さんの病状を見て知っていました。家を離れたかったのは、政石さんの心の底に「母を避けたい気持ちがあったようだ」と書かれています。

現在は完全に治癒する病となったハンセン病ですが、当時は効く薬の全く無い残酷な病気でした。治らないばかりか、病気が進むにつれて、姿形が人目にそれとわかるほど変形するため、忌み嫌われ、たいそうひどい扱いをうけていました。だから、政石さんは病



気にかかっているお母さんを恐れ、また、自分だけしかわからない病斑におびえながら、苦学していたのです。社会生活を続けながら、家庭で治療できる今日とは比較にならない苦勞。

そこへ戦争です。徴兵検査で病気を発見されるのではないかと心配していた政石さんは、何事もなく第一乙種合格で、入営しました。戦争に駆りだされるつらさよりも、「もうこれで、自殺しなくても死ぬる」という安堵感があつたそうです。

戦死すれば、残った家族に病気を知られることはなく自分の秘密だけで終わる……そう思つて、むしろ戦死を待っていたというのに、政石さんの隊は、戦う機会もなく敗戦となりました。そして、シベリアに抑留されてしまいました。

コノ線ヨリ許可ナク入ルベカラズ

コノ線ヨリ絶対ニ出ルベカラズ

古レンガを並べただけの線の内側の隔離小屋に、ひとりとしこめられていた政石さんは、ある日、自分のうずくまつた境界線から二メートルほど離れたところに、ほっかりとひらいた虹色の花を見つけました。

他にだれも見えていないのに、古レンガを並べただけの低い境界線にしばらく、線を踏みこえて花のそばへ近づいて行けない律儀な気性の人でした。律儀というよりは、怒りにみちた潔癖といったほうが、その気分に近いかもしれません。

のちに、青松園にはいつてから、療養の人びとが栽培しているいろいろな花々を「花乞食」せずにはいられないほど花好きの政石さんでした。まだ二十四歳のハンセン病を病む若者は、どんな思いで、手の届かないところに咲く一輪の花をながめたことでしょうか。限りなくひろがる空間はあっても、政石さんは目に見えない重い鎖で、小屋につなぎとめられているのです。虹色の花は、「理想」でした。「花のあるところまで自由な線の範囲をひろげてほしい」と医師に頼みました。そしてようやく虹色の花を、境界の内側にとりいれることができた時、政石さんは、花が輝かなくなるのを感じたそうです。『花までの距離』という題名には、入隊後隔離小屋で過ごした時の政石さんの切ない実感がこもっています。

朝、一日中の食料を持ってくる当番兵が去ると、一日、ひとり隔離小屋にうずくまっている明け暮れ。わたくしはこれまで、このような「花までの距離」があるなんて、考えてみたことがありますでした。いくどとなく花を見たり、さわったりしていても、だから花を知っているとはいえないような気がします。「自分が花と出会う」瞬間というのは、新たな「花の価値の発見」なのでしょう。どこにでもある花、そして、何度も見ていた花が、突然自分にとって特別に意味のある花、自分の心の中に咲く花となるうれしさは、だれもがこの世で味わうことのできるよろこびの一つではないでしょうか。



花に見られる

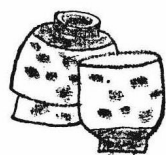
同じ、いのちをもつ存在ではありませんけれど、花は、人とまったくちがう存在のしかたをしています。花を咲かせる植物は地面に根をおろして生きていますから、人や獣のように自由に動くことはできません。でも、生きているもの、この現実とともに生存する貴重な仲間であることにはまちがいありません。わたくしにとっての花は、政石さんのようなきびしい状況での深い情念にかがやく虹色の花ではなく、弱虫の女の子がいきいきなさびしさをなぐさめてもらう感傷的なものでした。

生まれてはじめて「花から見られた」という意識を持ったのは、女学校二年生の六月でした。わたくしは小学校の間も何かというときよく熱をだして休み、周囲の人びとから「この子はとても無事に成長しないだろう」と思われていました。そのため、歩いて通うことのできる、近くて気楽な女学校へ入学しましたが、それでも、二年になったばかりの四月、学校でのいっせい検温の時に、体温が七度をはるかに越えているのを発見されました。一週間、検温に通いましたら、微熱が常態となっていました。改めて診察をうけ、結核性肋

膜炎とか、肺浸潤とか名づけられて、療養生活にはいることとなったのです。いわば、自覚のない段階で早期に発見されたわけです。相当病状が悪化するまで自覚しなかった同病の友人や知人たちは、娘時代に次々と亡くなってしまいました。そのころの結核は、現在のように治癒する病気ではなく、ハンセン病と同じように、人から伝染を恐れられ、警戒されていました。ただ、結核菌は、肺や腸など、体内の組織を荒らし、ライ菌は末梢神経をおかして外見を変化させます。だから、人の目にはライによる変貌の方が目につきやすかったのです。

自覚しないうちに熱だけを発見されたごく早期の状態のわたくしなのに、母は思い切りよく転地療養をさせました。ちょうど、四歳年上の兄、博もまた、剣道のけいこが過ぎたとかで乾性肋膜炎をいいわたされたのです。母は二人を、都心の住まいから離して、空気のきれいな郊外で養生させようと、毎日のように、借家を探しに出かけていました。

当時、結核性の病気は、清澄な空気を吸い、おふとんや持ち物をいつも太陽に干し、滋養物を食べて、できるだけ安静にしている……。つまり大気・滋養・安静の療法しか、対応する道はありませんでした。すこしでも「結核治療で有名な内科」と聞くと、遠いところへまでも連れてゆかれ、その診察をうけましたが、おどろくほど高価な診察料をとられ、特效薬と名づけたわけのよくわからぬ注射をされて帰るだけでした。わが家は決して、物持ちでも、お金持ちでもありませんでしたから、母はさぞ、うにいいない心労でお金の



算段をしていたのでしよう。親戚からは、「あんなたいそうな転地をさせるなんて、ぜいたくなことや」と、非難がましくいわれていたようです。父も賛成ではないようでしたが、不精不精、黙認する形をとりました。他の事ではすべてに忍従してきた母が、この件に關してだけは、必死の面もちで父に迫り、子らを転地療養させる許可を得たのでした。

公害汚染に苦しむ今の空氣とくらべたなら、夢のように美しい空氣だったでしように、それでも、「大阪は煙の都」といわれていました。「町の中から郊外に」清らかな環境を求めて、大阪の南東に当る帝塚山に小さな借家を借りました。母はついてくることができませんで、まだ結婚していなかった姉が暮らしを担当してくれました。二階にひと間ずつ自分の部屋をあてがわれて、兄もわたくしも安靜がちの日を送り、時々は登校して、進級に必要な登校日数をとるようにしました。

わたくしは、それまで庭さえもたない家に住む町っ子でしたから、土のにおい、山の道林の木もれ日など、郊外の自然がたいそう気に入りました。その静けさ美しさがうれしくて、できるだけ、本拠に帰るまいとしました。町の騒音や排気ガスのにおいがきらいでした。この騒音や排気ガスも、現在とは比較にならない静かな大阪だったと思いますのに。二十歳を越えたばかりの姉にとっては、にぎやかな都心が魅力だったのでしょうか。今思うと、弟妹の養生の面倒をよくみてくれたけなげな姉でしたが、時々本拠に帰っていました。それでもわたくしは、とくにさびしく思ったことはなく、そのころから台所仕事やお

ふろの用意など、日常的な生活そのものをたのしむ気分を知ったようです。姉の留守に舞いにこられた兄の友人や、親類の人などを、ひとくちカツレツや卵のおつゆなどでもてなした記憶がのこっています。ままごとが好きだったのですね。

その土地が帝塚山とよばれるのは、そこに小高い古墳があるからでした。同じ大阪市内でも、周辺部には田園風景がひろがっていた一九三六年（昭和二年）ごろのことです。帝塚山の丘のすぐそばの家でしたから、丘の上にも自由にのびれました。

昼の間は横になっていましたが、すこし日かげをのぞいて、散歩に出ました。その日によって、足のむくままに歩き回るのは、今では、どうしてそんな場所にさしかかったのか、全く思い出せませんが、ある日、ふいに満開の白百合の咲きつづいている百合畑に行き当たりました。その瞬間、はっと思って足をとめたわたくしの方へ、何百輪もの白百合の花が、ゆらりと顔をむけたような気がしました。その時の、白百合の花々に見つめられた思い、生きものの花に、こちらが見られているというぞくとした気分は、今も、ありありと身の内にのこっています。それからのちも比叡山の横川への道で、両側の大羊歯に見られたり、京都の芳春院の庭で、桔梗の花に見つめられたり、いくどか、「今、見られている」という意識を持ったことがあります。けれど、何といっても、あまがなしい思春期に感じた最初の印象は鮮烈でした。

五月、牡丹や薔薇の咲くころから六月にかけては、たそがれが長くつづきます。日が暮



れかけても、なかなか暮れ切らない夕方ゆづのうす紫むらさきの雰ふん圍い氣き。かぐわしい香かほり漂ただよう白百合しらゆり畑はたけにゆき当たった十三歳みぎの小娘こむすは、その時大いなる心の花をもらったのでした。

それまでいつも二人で仲なよく行動こうどうしていた友だちも、こちらが病氣で長く休むと、他の人と仲よしグループを組んでしまいます。それは、自然なことですので、に、登校してそのようすを見るたびに、やはり、「病氣」のもたらす不幸感を味わいました。回復するかどうかかわからない、というより、いつ死ななければならぬかわからないといった氣持のほうが強きく、一種の自暴自棄じぼうじきな氣分きぶんにおちいっていったのでしよう。

上級生や同学年生、また、下級生などから「愛しています」とか「交際してください」などという手紙がきても、「人の愛なんて、すぐに変わるのだから信じる氣はない」と、白しろけていました。はじめて母のそばを離はなれた療養生活りやうよう、そのころは、兄とも、八歳やっさい年上としうへの姉とも、心の内を語り合う力はありませんでした。兄も姉も、わたくしを子どもだと思っ
ていましたし、わたくしの心の内をのぞきこむことは、だれにもできないことでした。

その、人間に対する思いを冷たくこわばらせていた魂たましいに、いっせいに見入ってくれた数え切れない白百合の花の面。つぼみの時に出会っていたら、すっかりちがった印象になっ
たでしょうが、折りから満開の、百合の花々。天地のなかに、ふと与えられた白百合畑しらゆりはたけの豪奢ごうしゃな出会いのひとときが、それから忘れられない記憶きおくの一つとなったのです。